



IRS

カラバフ

松長 昭

開志専門職大学客員教授

元アルメニア・アゼルバイジャンナゴルノ・カラバフ紛争と和平への道

1. はじめに

1991年、ソビエト連邦の消滅によりアゼルバイジャンは共和国として独立を回復した。1918年から23ヶ月間独立国としてアゼルバイジャン民主共和国が存在し、赤軍の侵攻により崩壊した。それ以来ソビエト連邦を構成する民族共和国となっていた。アゼルバイジャンは、ソ連から独立したのではなく独立を回復したと明言している。帝政ロシア時代以来、ソビエト連邦の時代も含めてコーカサス

「分割して統治」を行い、各地で民族の対立や敵愾心が残るようにしていた。スターリンの民族政策は、コーカサスにおいてもアルメニア人とアゼルバイジャン人の対立や敵愾心が仕込まれていた。

歴史を遡ると、帝政ロシアや内戦期の1905年や1918年にアルメニア人、アゼルバイジャン人に対する虐殺事件、民族紛争、第一次世界大戦のオスマン帝国やイギリスなど列強による干渉戦争から、アルメニア人とアゼルバ



においても民族問題はすぶってきた。ソ連末期、ゴルバチョフがはじめたペレストロイカやグラスノスチの改革と情報公開から、封印されていた民族問題が明らかにされ、民族対立や紛争へとエスカレートした。

ソ連時代、ナゴルノ・カラバフ地域（アゼルバイジャン語で「高地ガラバグ」）はアゼルバイジャン共和国内の自治州であった。1980年代初頭、同地の住民に関して、アルメニア系が77%、アゼルバイジャン系が21%であった。ソ連共産党書記長であったスターリンは、国境画定に関して、民族の連帯が起きないように、民族の分断と対立を潜在的に埋め込んだ

イジャン人のナショナリズムが高揚し、両民族の対立が先鋭化した。両民族は内外の影響から時流に翻弄されてきた。

2. 第一次カラバフ紛争

1991年のソ連消滅がアゼルバイジャンとアルメニアとにそれぞれ共和国を誕生させた。2つの独立国が誕生すると、カラバフ地域の紛争は、地域内の紛争から国家間の戦争へと変貌することとなった。CSCE（全欧安保協力会議）が調停を試みたが、ソ連消滅による旧ソ連軍の兵器の横流しや闇取引が行われ、海外や旧ソ連から義勇兵、傭兵が参戦で



無理となった。91年9月2日、アルメニア系住民がナゴルノ・カラバフ自治州を「ナゴルノ・カラバフ共和国」として独立を宣言した。12月10日、独立を問う住民投票が実施されて既成事実化されていった。ロシアはアルメニアへ軍事支援を開始した。武力衝突の状況は、アルメニア側に優位で展開した。92年2月、ホジャル地区でアゼルバイジャン人の老若男女が虐殺される「ホジャル事件」がおきた。アゼルバイジャン人の村や町が失陥し、アゼルバイジャン側が不利な状況に追い込まれていった。アルメニアがアゼルバイジャンの占領地域を拡大していった。

1994年、ロシアの調停により両国が「ビシュケク議定書」を調印し停戦となった。停戦は紛争の解決とはならず、ナゴルノ・カラバフは「ナゴルノ・カラバフ共和国」を自称した。アルメニアはカラバフおよび周辺地域のアゼルバイジャン領の20%を緩衝地帯として占領した。この共和国は国際的に国家承認されなかった。旧ソ連のアブハジアや沿ドニエストル共和国などと同じような未承認国家であった。

第一次カラバフ紛争では、死者3万人以上で負傷者5万人がでた。民族浄化が行われアルメニア人約34万5000人、アゼルバイジャン人約100万人が故郷を離れざるを得ず避難民となった。難民キャンプでの生活は医療・衛生、住宅など様々な問題が山積され、最低限の生活状況にあった。ソ連崩壊後の混迷・困窮していた社会状況下では、難民問題は政府や国民にとり深刻な問題と負担となった。

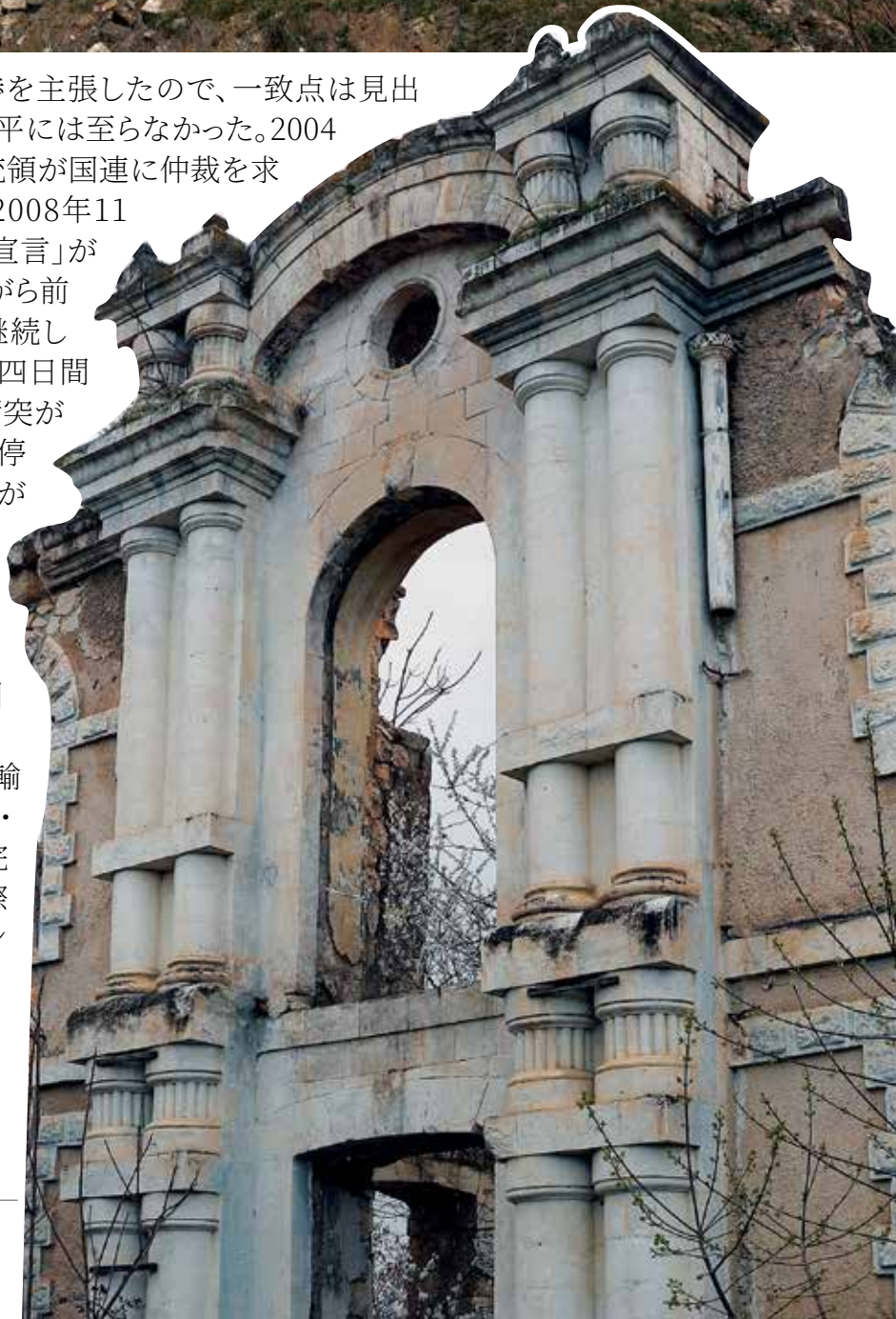
カラバフ紛争で殺害されたアゼルバイジャン人の遺体が毀損され、金歯が盗まれるなど非人道的な問題が多数発生した。アゼルバイジャン系住民が居住していた地区では、占領地にあったモスクや墓地などの貴重な文化や歴史の遺産がアルメニア人や傭兵によって破壊され消滅させられた。アゼルバイジャン文化が存在していたことが意図的に抹消されていった。

「ビシュケク議定書」の停戦が発効された後も小規模な衝突が発生し犠牲者もでた。カラバフ紛争での和平への道は険しかった。ミンスク・グループの仲介あっても、アルメニアは民族自決を主張し、アゼルバイジャンは領



土保全、国境不可侵、内政不干渉を主張したので、一致点は見出されず、平行線のまま恒久的な和平には至らなかった。2004年、アリエフ・アゼルバイジャン大統領が国連に仲裁を求めたが、アルメニアが反発した。2008年11月、ロシアの仲介により「モスクワ宣言」が成立し、和平プロセスがわずかながら前進したが、その後も緊張状態が継続した。2016年4月1日から5日まで、「四日間戦争」と呼ばれる大規模な軍事衝突が発生した。第一次カラバフ紛争の停戦後も両国関係は不安定な状態が継続していた。紛争当初からアルメニア側が軍事的な優位に進み占領地を一方的に拡大し、アゼルバイジャンは国土の20%を占領されるに至った。停戦しても両国民の敵対感情は悪化した。

2000年代、カスピ海産石油を輸出するためBTC（バクー・トビリシ・ジェイハン）国際パイプラインが完成した。日本企業の伊藤忠、国際石油開発（INPEX）もパイプラインの株主となっている。2005年5月10日にバクーから初めて送り出された原油が、1,770キロメートルを経て2006年5月28日にジェイハンに到達した。カスピ海産原油を地





中海のトルコのジェイハン港まで輸出が可能となった。アゼルバイジャンは石油輸出代金の一部を国防の充実にまわし、アゼルバイジャン軍がロシア製兵器などを購入し軍備を充実させた。アゼルバイジャンは占領地の回復の悲願を抱きながら、臥薪嘗胆の日々が続いていた。

他方、アルメニアはロシアの軍事的な支援によりアゼルバイジャンの国土20%を占領した。対アゼルバイジャンで勝利したアルメニアは、トルコ、ジョージア、アゼルバイジャン、イランに囲まれた内陸国で貿易・経済面で停滞していた。隣国トルコとはオスマン帝国での虐殺事件から外交関係がなく、ジョージアを通じての間接貿易、イランは米国の経済制裁をうけている所以对イラン貿易面でもアルメニアを満足させる貿易はできない。経済的な停滞が続き、若年労働者はロシアやヨーロッパに出稼ぎに出国した。海外送金がアルメニアを支えている。ロシアの軍事支援がなければ、自国で最新の兵器を調達することは難しくなっていた。アルメニアは安保や経済面でロシアに依存していた。アルメニアは占領地を維持していても、アルメニアのアゼルバイジ

ャンに対する軍事的な優位は時間の経過とともに低下していった。

3. 第二次カラバフ紛争

第一次カラバフ紛争の停戦後もアルメニアとアゼルバイジャンは恒常的な和平が構築されず、両国民の信頼醸成ができず、小競り合いなど散発的な衝突がおきた。それでも衝突は短期間におさまっていた。2020年9月、カラバフ地域で大規模な軍事衝突が勃発した。この紛争は第2次カラバフ紛争とも呼ばれている。1カ月半にわたる戦闘行為と4回にわたる停戦合意を経て、アゼルバイジャンが事実上勝利した。アルメニアとアゼルバイジャンの停戦合意後、仲介したロシアが停戦監視を目的にロシア軍を派遣した。ソ連消滅後にロシア軍がカラバフ地域に常駐するのは初めてであった。

アゼルバイジャンは、第一次カラバフ紛争の失敗から国土回復のため国防力の充実に重要な国家の政策としてきた。アゼルバイジャンには国防力を充実できる財政的な裏付けがあった。2000年代以降、BCT国際パイプラインの完成により、カスピ海産原油がパイプラ



インを經由して輸出できるようになった。その後、天然ガスパイプラインも完成した。石油や天然ガスの収入という潤沢な資金がアゼルバイジャンの国庫を潤すようになった。収入の一部を国防費に投入し、2010年からの10年間でアルメニアの3倍以上もの軍事予算を編成した。イスラエル、ロシア、トルコから最新兵器を購入していた。アルメニアとアゼルバイジャン両国の軍隊はほぼ同規模であったが、アゼルバイジャンは高性能な戦車、装甲兵員輸送車及び歩兵戦闘車多数を保有し、大量の攻撃型ドローンを導入していた。

第一次カラバフ紛争では、アゼルバイジャン軍はアルメニア軍に対して劣勢だったから、アゼルバイジャンの国土20%を占領されてしまった。過去の苦い経験から、自国が優位にたつためトルコ製攻撃ドローン「バイラクタル TB2」やイスラエル製自爆ドローン「ハーピー」を輸入した。それら兵器での想定される戦域や状況における戦術を研究していた。アルメニアに対して軍事的に優位にたつことができた。トルコはアゼルバイジャンと同じトルコ系民族であることから積極的にアゼルバイジャンを支援している。イスラエルはアゼルバイジャンからカスピ海産原油を輸入し、エネ

ルギー安全保障からもアゼルバイジャンとの関係を重視している。第2次カラバフ戦争ではアゼルバイジャンと利害関係を共有する国が増え、アゼルバイジャンの安全保障の環境を変えていた。

紛争で不利となったアルメニア側が大量の地雷を埋設して撤退した。アゼルバイジャン人兵士や住民が地雷に触れて死亡、負傷する事案が発生している。地雷撤去が人道上的問題として残っている。アルメニアは撤退にあたり森林の樹木を伐採し火を放つなどをした環境問題が起きている。アゼルバイジャン側が紛争で勝利しても、紛争後にカラバフ地域にさまざまな問題が残されている。

アゼルバイジャンの優位で推移したカラバフ紛争は、11月9日にロシア連邦プーチン大統領の仲介により、停戦協議が行われた。この結果、アゼルバイジャン・アリエフ大統領、アルメニア・パシニャン首相が停戦協定に署名し、モスクワ時間11月10日0時から停戦が発効された。

停戦合意により、アルメニアとアゼルバイジャンは捕虜と戦死者の交換を約束し、アルメニア軍は、12月1日までにカラバフ周辺のアルメニア占領地域から順次撤退した。ロシア



陸軍からの2,000人規模の平和維持部隊が、アルメニア本土とカラバフを結ぶラチン回廊沿いに5年間駐留することとなった。アゼルバイジャンは独立後ロシア軍の駐留がなかったから、アゼルバイジャンの譲歩でもあった。アルメニアは、アゼルバイジャン本土とナヒチェヴァン自治共和国(アゼルバイジャンの飛び地)間の輸送路建設を保証し、輸送路管理はロシア連邦保安庁(FSB)国境警備隊が行うこととされた。ソ連時代にイラン国境に沿ってアラス河沿いにアゼルバイジャンからアルメニアを通過しアゼルバイジャンの飛び地までの鉄道があった。いまは休止路線となっている。この鉄道路線の復活も計画されている。このルートが復活すれば、トルコがアゼルバイジャン本土のみならず、カスピ海を経由して鉄路で中央アジアにつながる。すでにアゼルバイジャンからジョージア経由でトルコまでの鉄道は開通しているから、トルコとアゼルバイジャンにより選択肢が増える。

4. 平和維持と今後の動向

2020年に勃発した第2次カラバフ紛争の結果、アゼルバイジャンはアルメニアに奪われた土地の大部分を回復した。ロシアはアルメニアとアゼルバイジャン両国が署名した停戦協定に基づき平和維持部隊を派遣し、カラバフ地域とアルメニアを陸路で繋ぐ「ラチン回廊」の通行の確保と平和維持に努めている。最近になってラチンを含む幾つかの拠点の管理権をアゼルバイジャンが回復した。このような動きに対して、アルメニア国内の反発も大きく反政府の運動が続いている。

カラバフ出身のアゼルバイジャン人の知り合いがカラバフ紛争停戦後に故郷の町を訪問した。彼の一族の墓地を訪問したが、アルメニア占領期に墓地が破壊されて整地され跡形もなくなり、墓地の存在が消されていたとのことであった。民族紛争での対立や占領がおきると、歴史的な遺跡、文化財などが抹消されることが起きている。これも民族憎悪を一層深刻化させる。カラバフからアルメニアへ帰還するアルメニア系住民が家財一切のみならず、墓地に埋まっている親族の遺体も一緒に持ち帰るという報道があった。アルメニア側がアゼルバイジャンでの占領地を拡大したとき、アゼルバイジャン人の墓地を破壊し、遺体を損壊したことを行った。同じことが自分たちにも報復され行われると思ったのであろう。退去するアルメニア系住民は自宅に放火し、モルタル造りの家には、部屋の壁にイスラム教徒が忌避する豚の血をなくなどの嫌がらせをしたのが動画に残されSNSで拡散された。民族対立と憎悪が人としての理性を失わせ感情のままに行動したのであった。

ロシア軍の平和維持部隊が常駐するようになったが、アルメニアとアゼルバイジャンの両国隔離を図っているが、小競り合いがアルメニア人ゲリラにより散発的に発生している。両国民の恒久的な和平に向かうことが困難であることが分かる。紛争が停戦しても民族の対立や憎悪を解消するのも簡単ではない。✿